

松山幸生先生講述・第2回

キリストを証する七つの言葉

第1章⑤節から⑭節 御子は天使にまさる。

- ⑤いったい神は、かつて天使のだれに
「あなたはわたしの子
わたしは今日、あなたを産んだ」と言われ、更にまた
「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」
と言われたでしょうか
旧約聖書からの引証箇所
詩編第2編⑦節
サムエル記下第7章⑭節
- ⑥更にまた、神はその長子をこの世界に送るとき
「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」と言われました
- ⑦また、天使たちに関しては
「神は、その天使たちを風とし
御自分に仕える者たちを燃える炎とする」と言われ
詩編第104編④節
- ⑧一方、御子に向かっては、こう言われました
「神よ、あなたの玉座は永遠に続き
また公正の笏が御国の笏である
詩編第45編⑦節～⑧節
- ⑨あなたは義を愛し、不法を憎んだ
それゆえ、神よ、あなたの神は、喜びの油を
あなたの仲間注ぐよりも多く、あなたに注いだ」
- ⑩また、こうも言われています
「主よ、あなたは初めに大地の基を据えた
もろもろの天は、あなたの手の業である
詩編第102編⑳節
- ⑪これらのものは、やがて滅びる
だが、あなたはいつまでも生きている
すべてのものは、衣のように古び廃れる
- ⑫あなたが外套のように巻くと
これらのものは、衣のように変わってしまう
しかし、あなたは変わることなく
あなたの年は尽きることがない」
- ⑬神は、かつて天使のだれに向かって
「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで
わたしの右に座っていなさい」と言われたことがあるでしょうか
詩編第110編①節
- ⑭天使たちは皆、奉仕する霊であって
救いを受け継ぐことになっている人々に仕えるために

遣わされたのではなかったですか（第1章⑤節から⑭節）

「ヘブライ人への手紙」には多くの旧約聖書の引証がなされています。今回の冒頭の六つの言葉も全て旧約聖書の言葉です。参考の為に出典を記しました。

1. 神の御言は人々の心の中に響いていかなければならない

教会で伝道活動をしていますと、気になることが色々ありますが、その一つが「教会で語られている福音が、本当に世の人々の心に届いているだろうか。」という疑問です。実際、この国のクリスチャン人口は1%にも満たない状態ですから、殆どの民衆の心に福音が届いていないことは確かです。それでは、人々に福音が届かない理由は一体何なのでしょう？

ちょうどイスラエルも、或いは、キリスト出現後のユダヤも、そういう意味では似かよっていたと思われれます。神の御言が語られ、礼拝は行われている。しかし、人々の心にはそれが届いていない。つまり、御言が人々の生活を支えたり、動かしたりする力になっていない、という現実^①に在る者が多勢を占めていたのです。

それを、別の観点から見れば、御言を語る者が「御言を語りかけられる対象と共に生きていない」という現実があったのではないだろうか。自分は高いところに立って相手にもものを語ったり、或いは、全く別の視点から筋違いのことを告げたり、生きている現実の中で喘いでいる人々の痛みを痛みとせず、共に担うこともしようとせぬまま、御言だけを口にしていることが多かったからではないだろうか。

ところが、そういった時代の中で、本当にとことん低いところまで降って行かれ、群衆と言われる人々と真に共生されたイエス、その御方だけが、実にその御方だけが、福音を福音として語ることがお出来になった。そうした主イエスの御言は、人々の心の内奥に響いていった。そういうことが言えるのではないのでしょうか。

「神の御言は人々の心の中に響いていかなければならない。」少なくともこの手紙の著者は、そうした観点に立って聖書の御言を味わっておられたのだらうと思います。ですから縷々延々と語るとか、自分の持てる語彙だけで表現するのではなく、今回は特に多くが旧約聖書の御言葉の引証であり、著者自身の言葉だけというのは、殆ど見当たらないのです。

つまり、これから学んでいこうとしているこの手紙の文章の第一番の基調をなしているのが、この第1章の⑤節から⑭節までの『七つの旧約聖書の言葉からの引証』だということであり、しかも、その七つは、いずれも『キリストに関する証言』なのです。

「この御方こそが、キリストである。」そのことを旧約聖書が告げている言葉を引証しながら、「御子なるキリストは、父なる神から『神よ、主よ』と称され、そのように取り扱われている御方ですよ」と人々に告げようとしています。

そして、キリストについて更にご紹介していくにあたり、先ず「この御方は天使にまさる御方である」ということを、語ってゆきます。

2. 天使礼拝について

天使という言葉、今の私たちには余り馴染みのない言葉ですが、この言葉は色々な意味を擁しています。天使、御使い=アγγελオスは、新約においては「神から遣わされた使者」のみならず「天的な世界の代表者」として捉えられ、その顕現は「地上世界への彼岸的啓示」とも捉えられています。特に福音書や使徒言行録では「人間に現われ、神の使信と委託業務を伝達する」に加え、多くの重要場面で「守護天使の表象」が見出されています。かように天使は、人格を有する者、超自然的、靈的な存在と考えられていますが、それは同時に、人間と同様「神によって創られた存在」であると示されています。

私たちは、著者が、何を私たちに語っていかうとしているのかに興味と関心を集中して、その言葉を味わっていくことが大切であると思います。特に、天使論を語るこの著者は、「キリストと天使とは比較することのできない異質な存在である。即ち、イエス・キリストは神から産まれた御方であり、天使は神によって創られた存在である。従って、この二者を比較すること、或いは、この二者を様々な形で私たちが取り違えることなど、決して許されない。そういう存在がキリストなのだ」ということを力説しています。

ここで申し上げておきたいことは、神の戒めや御命令を、私たちが真剣に受けとめていこうとすればするほど「神の聖さ」とか「神の公正さ」とか「神の正義」というものが、際立って私たちの頭上にのしかかってくる。その「重さ」を何とかしつかり受けとめようともがいても、私たちの持っている罪の性質、○でなく△の曖昧さ、いい加減、逃げ腰、果てはxでもいいさという開き直りが反作用として働いて、神から遠ざかっていってしまうことになります。そうして、肝心の「神の愛」とか「神の憐れみ」とか「神の赦し」さえも見えなくなってしまうというステップが、現実には起こってきたりするのです。

そういう中でユダヤの人たちは「決定的な人間の罪の性格」と「神聖なる神の属性」とを取り結んでくれる存在として、『天使』という存在を捉えたのではないのでしょうか。

ですから、神と私たちの間を行き来するために「天使は羽根を持っている」と言うのです。すごく面白い発想です。その羽根によって、高い所から低い所まで降りて来てくれる、低い所から高い所までまた上ってくれる、それが「私たちと神との間を結ぶ仲保者の天使なのだ」という捉え方なのです。

しかし、都合の良い仲保者であるにしても、その天使は創られた者、被造物ですから、間違いを冒すこともありうるのです。そうすると、神から天使である権利を剥奪されてしまうことが起こることも聖書の中に出てくるわけです。ですが、いずれにしても、神が私たちのために与えてくださった存在として、天使というものを捉えてきたのです。

元々「人間」は、エデンの園の木とか草とか生き物とか形あるものを統治するように、神から責任委譲を受けた。一方「天使」は形のないもの、風とか炎とかを、神に代わって支配するように権利委譲を受けたということです。ですから、目に見えるものを私たちが追い求めて行き詰まった時には、目に見えないものによって神の存在を知らせてくれるのが天使の働きであって、そういう意味で、天使は私たちに神の御愛を伝える大事な役目を担っているのだと考えられたわけです。

神は、人と天使其々にそういう委譲を始められたわけですが、だんだん人間はずる賢くなり、絶対的な力をおられ、自分たちが頭の上がない御方よりも、身近で自分たちを慰め励ましてくれる天使に感謝して、天使も満足し、その関係性の中で、姑息にも自分の人生を都合よくコントロールしていけると思うようになっていった。それが「天使礼拝」の起源なのです。

この手紙はそういう意味での「天使礼拝」を非常に熱心に訴えかけることにより、「真の神礼拝とは何なのか？」ということをはっきりと明らかにしていきます。しかも理屈をこねるのではなく、「旧約聖書の中にはこう書かれていますよ、神はかように私たちにお告げになっています。」ということをはっきりと、大変丁寧に語っているのです。

このことは、私たちが今「神礼拝」と呼んでいることの中にも深く入り込んでいるだろうと思われまゝ。「神の何を礼拝しているのですか？」と尋ねれば、神御自身ではなく、与えられた「恵み」を感謝し礼拝している、与えられた「幸い」を讃美し礼拝している、と、多くの人が答えるでしょう。恵んでくださった神に対してではなく、恵まれたものを感謝し、賛美している、というような形になっているとすれば、それは「異なる形での天使礼拝」にすぎないのです。

ここから⑤節から⑭節を丁寧に読んでいきますが、その間に「神は言われた」という言葉が繰り返し出てきます。この繰り返しは、著者が「これが聖書の真理なのだ」と是非伝えたい箇所であり、熱が入っています。

第⑤節前半

いったい神は、かつて天使のだれに、「あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ」と言われ、更にまた、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」と言われたのでしょうか。

前半の「あなたはわたしの子、わたしは今日あなたを産んだ」という書き出しは、詩編2編⑦節からの引証です。

2編⑦節全体は「主の定められたところに従ってわたしは述べよう。主はわたしに告げられた。『お前はわたしの子 今日わたしはお前を産んだ。』」とあり、この箇所は「キリストのメシア預言」と言われています。

著者は、この御言を第一に置くことによって、キリストが神の子であり、神がキリストをお産みになった、ということを強調しています。

『主』あるいはメシアという言葉は、ヘブライ語では元々「油注がれた者」という程度の意味で、王様とか祭司というものを指していて、直接、救い主を意味していないことが多かったのですが、ここでのメシアという言葉、『主』と呼ばれる言葉は、天使たちや人間のような、神によって創られたものに対してではなく、神によって産み出された、神の御子、直系の子だけに対してであることを、明らかにしています。

ここでは、詩編2編の⑦節だけを引証していますが、実はここを引証することによって著者は、詩編2編全体に目を向けさせ、メシア預言というものを訴えかけていこうとしているのです。

詩編第2編

①なにゆえ、国々は騒ぎ立ち、人々はむなしく声を上げるのか。

②なにゆえ、地上の王は構え、支配者は結束して主に逆らい、
主の油注がれた方に逆らうのか。

③「我らは、枷をはずし、縄を切って投げ捨てよう」と。

ここでは、この世のすべての力が、メシヤに対して反抗していることが謳われています。

④天を王座とする方は笑い、主は彼らを嘲り、

⑤憤って、恐怖に落とし、怒って、彼らに宣言される。

⑥「聖なる山シオンで、わたしは自ら、王を即位させた。」

⑦主の定めたところに従ってわたしは述べよう。主はわたしに告げられた。

「お前はわたしの子、今日、わたしはお前を産んだ。

⑧求めよ。わたしは国々をお前の嗣業とし、地の果てまで、お前の領土とする。

⑨お前は鉄の杖で彼らを打ち、陶工が器を砕くように砕く。」

⑩すべての王よ、今や目覚めよ。地を治める者よ、諭しを受けよ。

⑪恐れ敬って、主に仕え、おののきつつ、喜び踊れ。

⑫子に口づけせよ。主の憤りを招き、道を失うことのないように。

主の怒りは瞬く間に燃え上がる。

いかに幸いなことか 主を避けどころとする人はすべて。（以上詩編第2編）

この詩編では、メシアという存在がどんな御方であられるかを謳っています。詩編の中で主が「お前」と呼んでおられるのは、正にキリスト（御自分の産んだ独り子）を指しておられるのです。こうした詩編をもって、「メシヤの主権性」と、その御方がこの時代の執行者なるを強調しようと神が願っておられることを、読み取ることができると思います。

また、この詩編第2編は後半の⑧節以下にも「『終末の日』に関する神の大きな慰めの御言」が私たちに与えられているのです。「神は『終わりの時』には、あなたにわたしの国を嗣業として委ねる」と。

『終末の日』； マタイ3-14、マルコ13：3-13、ルカ21：7-19には、終末の徴と、その際次々と大きな試練に見舞われることが記されますが、同時に、そうした終末の日においては、神の大きなお慰めに与ります。かような、終わりの時までのある期間を表します。

『終わりの時』；Iペト 1:3-4に「神は豊かな憐れみにより、私たちを新たに生まれさせ、死者の中からイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産（嗣業）を受け継ぐ者としてくださいました。」とあるのが、終わりの時に生じ、かつ与えられることのあらましです。特に5節に「あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。」とあり、救いの授与が成就されることを示しています。（森容子先生に加筆をお願いしました。）

言い換えれば「イエスがすべての国を統治なさる。そしてあらゆるものが『主』ご自身の手によって支配されることになる。神に背くものはすべて彼の杖によって打ち砕かれ、悪は完全に滅び去る。だから「『主』を畏れ敬って、その方にお仕えなさい」ということが毅然として描かれているのです。

私たちはそういう視点、旧約聖書がもっている一つの観点(主の統治と支配権)をきちっと踏まえていかなければならない。つまり「イエスが来られて、再び天に帰られた後に、また、おいでになるそうだ。その時には裁きが行われるということらしい。」などというように想像、空想して、終末の日を捉えるのではなく、正に詩篇の詩人たちが、遠い遠い彼方に起こる事柄をしっかりと見据えて預言したように、この言葉にして、しっかりとした信仰をもって受けとめていくことが求められているのです。

少なくとも著者は、そのこと（終末の日には再臨のイエスによって裁きが行われること）を非常に明確に自分自身の中で位置付けながら、「このことこそが神が私を創ってくださったという告白であり、神が全てのすべてをご所有なさる御方である事を証する道なのだ。神の全知全能とは正にこういうことなのだ。」ということを語ろうとしているのです。それには「イエスこそ神の子であり、御独り子なのだ」という信仰が、この詩編二編の中に既にはっきりと謳われていることを引証しながら、先ず「イエスが神の子であられる」ことを著者は力強く証したわけです。

第⑤節の後半、

更にまた、（天使の誰に）『わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる』と言われたでしょうか。

この『』の部分は、サムエル記下7章14節における神の御言です。

預言者ナタンがダビデに、王としての祝福と、その王国の王座を約束した場面なのです。その王座がとこしえに続くという預言は、ダビデ、ソロモン王に始まる長い王朝系列の子孫がキリストにおいて完成されるという、主の遠大な御計画の上に成就しました。そのように、キリストがすべての者の王として誕生されることを、主はナタンを通して千年以上も前から約束されていたのです。

それに続く箇所では、イエスが神の子であり、父と御子の関係にあられる、ということをはっきり述べて、その意味で、天使ではない、被造物ではない、キリストのまごうことなき優位性を強く訴えかけているのです。

第⑥節

更にまた、神はその長子をこの世界に送るとき

「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」と言われました。

ここで著者は、「礼拝の対象としてのキリスト」をきちんと位置づけ、天使はキリストを礼拝する存在にしか過ぎない、ということを語っています。

当時のユダヤ民族の慣習では「家督権、即ち、父親の持っている一切の権能を譲渡され、それを執行することができるのは、長子に限る」とされていたのです。ですから、神は「長子を」とあるのは、「神の権能を委譲される存在としてお産みになった子」という意味で、御独り子イエス・キリストを指しておられるのです。

神の独り子とは、父なる神が礼拝される時、（自動的に）共に礼拝されている存在であられるということです。御子は「仕える存在」とも言われますが、御父にお仕えるのではなく、御父の代行者としてこの世に仕えられる、御父と共にあられる存在、それがイエス・キリストという御方であられるのです。

この辺の論議が私たちの中できちんと結論付けられない限り、三位一体の信仰は非常にあやふやなものになってしまいます。「父なる神、子なる神、聖霊なる神」と唱える時、神は、もしかすると、三体であられるのではないかと考えてしまう、そういう危険性をもっているわけで、その辺のところを明確にしておかねばならないと思うわけです。

ここに「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」と書いてありますが、「礼拝する；プロスクネオー」という言葉は、「天使たちよ、あなた方は皆、この御方の御前にひれ伏しなさい」という意味の言葉です。

そういう、神様にひれ伏す行為、即ち「自分を最も小さく卑しい者となし、そして自分自身を御前なる神様に委ね切る状態」、そういう姿を「ひれ伏す；プロスクネーサー」と、「主を礼拝する」と同系列の言葉で表現しているのです。

ここで言う「礼拝」とは、そういう姿なのです。ところが、私たちは礼拝する時には、やや「身構える」のです、「ひれ伏す」のではなく。一体何が祈られるのだろう、牧師は何を語られるのだろう、と身構えて（或いは、耳をそば立てて）礼拝の説教を聞くことは、それは、ひれ伏している態度ではないのです。それも、礼拝の在り方のひとつではありませんが。（猛反省です）

しかし、「私たちは本当に神の御前に捨て身になり、自分自身のすべてをかなぐり捨てて神を神として礼拝しているのだろうか？」という厳密な問いとなりますと、どうもそうではありません。神を礼拝する際に、自分の要求を神に強要することになっているという態度が、ほんの少しでもあれば、それは、礼拝をしていないことになるわけで、ゆえに「天使たちよ、あなたがたにも言い分はあるだろうけど、一切そういうものは要しない。唯、あなたがたは虚しくして、神の御前に頭を地面にすりつけ、膝をかがめて礼拝しなさい、拝みなさい。そうするのが、イエスをキリストとすることなのです。」と命ぜられているわけです。私たちはそういう神礼拝の在り様というものを、この部分から教えられていると思います。

第⑦節、

また、天使たちに関しては、

「神は、その天使たちを風とし、御自分に仕える者たちを燃える炎とする」と言われ

この引証は、詩篇104編④節の言葉です。

この御言を著者がここに置いている理由として、「イエスの主権性」あるいはイエスが持つておられる「優位性」というものをきちんと位置づけて、そのことから、天使が有するところの、神に仕える者に過ぎないという性質、そういうことをここに示しているのだろうと思います。そして、その天使を、これから少し紹介していきます。

天使は神によって人格を失うケースもあるし、自然の力に過ぎなくなることさえある、御子はそうした一つ一つの事柄に具体的に臨まれて、この天使たちが御子に仕えることを求めておられます。即ち、天使というのは御子に仕える存在に過ぎないのです。天使たちに「神を礼拝せよ」と命じ、続いて「天使たちはわたしに仕える者たち」と表現されて、神御自身が「天使というものは、人間と同じように神に仕えるために創られた存在なのだ」と位置づけているのです。

「御子の命令を風のように速く、風よりも早く伝える伝令者に過ぎない、あるいは人々の風聞に左右されないで、神の正義を実行する燃える炎のような役目を持つている者だ」ということを「神はこの天使たちを風とし・・・」と表現しているのです。

「風」と仰るのは速さと力強さですね。「燃える炎とする」と仰るのは、あらゆるものに支配されずに、そのすべてを焼き尽すような熱意をもって、神の御心のみを伝えていこうとする天使のまっすぐな姿を表しています。

天使は神の傍近く在って、風や炎のような力を持つてはいるが、神の御赦しにおいてのみ、そのことを行使することが許されているのです。天使というものの姿が何となく茫漠としていた時代の中で、著者は天使というものをこのように明確に捉え、輪郭づけて説明してくれているのです。

つまりは「私たちが救い得る御方はイエス以外にはおられない。天使がどんなに一生懸命に神にお仕えしていても、実際に人を救う力は持ち合わせていないのだ」ということを告げているのです。

第⑧節、

一方、御子に向かってはこう言われました

「神よ、あなたの玉座は永遠に続き、また、公正の笏が御国の笏である。」

⑧節になりますと、今度は天使から、またイエスについての言葉に戻ります。

「神よ、あなたの玉座は永遠に続き、また公正の笏が御国の笏である。」というこの言葉は、詩篇45編⑦節が引証されています。

ここでは再び、キリストが主であり神であることを示すことになるわけで、この言葉は新約聖書の中に最も多く引証されている言葉ではないかと思えます。キリストが「非常に明確に神と呼ばれている箇所である。」と言えます。

先ず、「神よ、あなたの玉座は」という呼びかけの「神よ」という言葉は「メシアよ」という呼びかけと同じものです。そしてここでは、「神よ」と「あなた」という呼びかけの言葉が、父と子の間では区別されないで使われています。父と子とは一つなる神であると考えられる、そういう発想から「神、メシヤ、独り子」が一つとなって、全く唯一の人格の表現として捉えられているのです。メシヤと神とは、全く同じ権威をもっておられるひとりの御方であられます。

別な箇所には、「あなたは、天地を神がお創りになった時にはその傍にいた」と謳っている箇所もあるわけですが、正にイエスという御方はそういう御方なのだということもここでも語っています。この玉座での永遠性とか、正義と公平に満ちている御姿、そういうものがこの⑧節では非常に強く印象付けられています。

第⑨節

あなたは義を愛し、不法を憎んだ。それ故、神よ、あなたの神は、喜びの油を、あなたの仲間に注ぐよりも多く、あなたに注いだ。

キリストが地上で歩まれたその歩みを具体的な形で語ろうとするわけですね。イエスは、この地上においてになって義を愛し、不義不法を憎まれた、そして喜びと祝福の油を注がれて、メシヤとしてこの世に仕え、かつ君臨なされた。その御方が歩まれた道は、正に受肉から始まって、十字架の御受難、御復活、御昇天というプロセスを経て、元々の神の右の玉座に座しておられる御方なのだ、ということが告げられています。

第⑩節から⑫節

またこうも言われています。

「主よ、あなたは初めに大地の基を据えた。もろもろの天は、あなたの手の業である。

これらのものは、やがて滅びる。だが、あなたはいつまでも生きている。

すべてのものは、衣のように古び廃れる。

あなたが外套のように巻くと、これらのものは、衣のように変わってしまう。

しかし、あなたは変わることなく、あなたの年は尽きることがない」

今度の引証は、詩編102編⑳節から㉑節です。

この箇所は、バビロン捕囚の後期、多大なる苦難と悲しみの中にあって、シオン（神の都エルサレム）の回復を待ち望みながら過ごしている人々、そういう人々が、ヤーウェへの信仰を抱き続けて礼拝することができるようにという祈りをもって、謳っている詩歌なのです。正に、望みを持つことができない現実の中で、神は私たちの信仰を回復してくださる、神のみが救ってくださる、その御方が私たちの側にいてくださる、ということを実際に信じて訴えかけている。だから、神に立ち帰ろうではないか、神を礼拝し続けようではないかと、共に高らかに賛美を奉げているのです。（こうした畳みかけは松山先生ならでは!）

恐らく著者も、この詩人たちの熱い思いや祈りに深く同感して、この言葉を引証していると思います。「天も地も主が創造された。だから、また主によって滅ぼされることもあろう。天も地も寄り頼むに値しない、信じ切れるのは、変わることもなき神なる御方だけ」ということが、ここでは謳われているのです。

1章の⑤節から⑭節までは、序論でありながら、ヘブライ人への手紙の主な内容に触れているのです。

そういう神の大きな御力、大きな御恵みを、本当に私たちはしっかりと捉えていかなければならない。無論、私たちは、この詩編102編を「神の栄光を讃える詩」となして読んでいくわけですが、同時に「メシア預言をしている詩」と捉えて、この詩を朗唱してみることも大変大切なことと思います。

「キリストを主と呼ぶ、そして、主として受けとめ、理解する」それが大事な意味を有することを、この旧約聖書の御言葉を用いながら、著者は訴えかけているです。「旧約聖書の理解の仕方は、神の栄光を讃える詩としてのみ、この102編を読み終えてしまうのでは

なく、更に、キリストの力がそこに暗示されている、という観点からも捉えるならば、私たちは正に、旧約聖書を福音的に理解していると言うことができる。」と。

律法の世界において起こった事柄を、福音の世界においてもう一度捉え直していく作業を、御言を味わいながら進めてゆかねばならないことが、ここに示されているのです。

第13節

神は、かつて天使のだれに向かって

「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座っていなさい」と言われたことがあるでしょうか。

この言葉もやはり大切な言葉です。これは詩編110編①節の引証です。イエスもこの言葉を引証なさって「誰がわたしを主と呼んだか、ダビデさえもそう呼んだではないか」と訴えておられたのです。そういう引証の仕方、キリストこそが王としての勝利される御姿を高らかに謳っています。そういう預言の言葉なのです。

ところで、「あなたの敵をあなたの足台とするまで」と書いてある部分は、私たちには捉え難いですね、それは、当時の詩編が読まれた時代の習慣として、二つの国が戦った時、勝利をした側の王様は相手の王様を横倒しにして、その首に足をかけ、勝利の宣言をしたのです。ですから「あなたの頭を私の足台とする」ということは、完全なる勝利を収めて、自分が代わって王位に就くということを宣言しているのです。日本には、そんな習慣はありませんでしたから、分かり難いのも当然ですね。

ですから、これは、イエスがサタンに対して徹底的な勝利を収め、彼を打ち据えて、その上にご自分の足を乗せて勝利の宣言をなさる、ということに匹敵することなのです。その日まで、イエスは神の右の座に。当時の王様の右というのは王様の次の者が就く一番高い位ですから、神が「わたしの次の位、わたしに代わる者、わたしの代行者として私の傍に立っていなさい」と仰ったという意味です。

この部分をもう少し砕いた形で言えば、「再臨によって世界が神の裁きを受けた暁には、イエスと神とは全く合一される。それまでの間、神の意思を代行する御方としてイエスは、この世に遣わされ、今や、神の右の座にあられる存在として、神の代行者として、神の御業を私たちの間に示してくださる御方なのだ」と告げているのです。

そして、終わりの時には、キリストは創造者であられ、裁き主であられ、しかも救済者であられるという唯一の位格として、神の中に合一された形で立たれるのです。だから、「わたしが最後の勝利を収める時まで、わたしの右に座していなさい」と神は告げらるのです。

神は、イエスに対してはそうであられたけれども、天使にはそのようなことは告げられていない。天使はあくまで神に仕える者であるから、神の代行者だとは告げておられないというのが、著者がこの部分で語ろうとしている内容なのです。

それは、どんなにこの時代が根深く「天使礼拝」がなされ続けてきたか、ということを示しているのです。しかも、そういう根深い「天使礼拝」の状況というのは案外、困難の中では起こって来ないことなのです。

つまり、ちょうどイエスが昇天なさり、初代教会が生まれて約60年ほどの時が経った、1世紀の終わり頃で、「使徒教父たちの時代」に起こるわけです。使徒と呼ばれた人たちはほとんど殉教により亡くなり、2代目3代目になってくるという現実にある頃です。

そして激しいネロの迫害なども一応終わったという、ほっとした安定期なのです。

そんな安定期に入ったイスラエルでは、パウロの熱烈な聖霊運動、リヴァイバル運動も静まったし、ユダヤ人との人種問題、キリスト教とユダヤ教の対立も一応解消されたという形で、キリスト教会が存続できるようになったので、ほっとした側面を持っていました。

この頃のユダヤの社会状況について山谷省吾さんが書かれた興味深い文章があります。

「彼らはそういう状況であっても社会不安を持っていた。社会不安の中にいる彼らの現状は信仰的に見ても甚だ憂うべきものがあった。信仰における喜びを経験することが薄く、信仰をもって世に打ち勝つには足る力がなく、日々の生活の圧迫の中に気力が衰え、倦み疲れ、忍耐に乏しく、信仰の後退を示し、時には集会を止め、信仰以前の生活に転落しようとしていた」と。（山谷省吾：末尾に略歴表示）

今日の教会の現状を鑑みるに、大変似ている部分があるのではないかと思います。信徒一人一人が「キリストによって私は救われた」という、その福音によって生かされている喜びを本当にしっかり握っているかと言えば・・・信仰によって打ち勝っているかと言えば・・・甚だ心もとないものがあります。「主よ、来たりませ！」と神を待ち望むことも余りしなくなりながら、反ってせっかちになり、卑近な解決法ですべて事足れりとしてしまう生き方が横行し、広がりつつある。とすれば正に、ヘブライ人への手紙を書いた時代と今日とは酷似しているのです。

信仰によって迫害に遭うこともないし、今、「クリスチャンです」と告げても別に世の中からの抵抗があるわけでもない。熱くもなく冷たくもない、なまぬるい環境下での毎日の中で、信仰があれば少しは良いことがあるのではないかな、という程度の、熱くもなく冷たくもなく、なまぬるい信仰を持ち続けながら、なんとか歩いている。

今日の教会には「ここにしか救いがない」と言い切ることができる熱烈さというか、明確な信仰というか、イエスが仰った御言で言えば、「イエスが唯一の道であり、命であり、真理である。」ということ、はっきりこの世に向かって宣言する力を、持ち合わせているのかどうか。それを問い返そうという機運、息吹にさえ、欠ける。

もっとシリアスな表現で言えば、「洗礼の執行権が委ねられているキリストの教会にしか、救いはない」と告げれば、「それはおかしい、神はどこにでも存在されて、誰にも救いをもたらされるのだから、どこでも救われるのだ」などと切り返されてしまう懸念が心をもたげる。そういう信仰的妥協というものが、世の中に沢山、そして、教会内にも、流出してしまっているのではないかと思います。

(松山幸生先生のこの毅然としたお言葉は私の魂を悔恨へと導く。私のことをずばり突き刺される。真実を露わにされて、アダムとエバのように隠れたくなる思いです。それと同時に「お前はどこにいるのか(信仰的立ち位置は)?」と、私を質し、探し出して頂きたい思いです。)

第⑭節、

天使たちは皆、奉仕する霊であって、救いを受け継ぐことになっている人々に仕えるために、遣わされたのではなかったですか。

こういう時代の中で私、松山は、この手紙のもっている特色は、そういう時代だからこそ、「お前たち、あなたがたは駄目だと、上から決めつけてはいけない」と告げていることだと思うのです。むしろ、そういう叱責の言葉を向けるよりも、どのように導けば、この人たちは勇気づけられて、本当のもの、神に出会ってくれるだろうか、非常に忍耐強く考えながら、先ず神と出会うための妨げとなっている「天使」という存在を「天使は神と同じではない」と聖書は言っているのだと丁寧に説明します。

「今、あなたがたは、お手軽に心の傷を癒そうとしている、そういう半端な癒し方を止めなさい、そうではなく、深い心の傷が癒される本当の道がある。それを見出しなさい」と優しく呼びかけている。そういう仕方で書かれているのだと思います。この意味では、この手紙は「慰めの手紙」だとも思うのです。

しかも聖書の御言葉をいつもしっかり捉えながら、あなたがたの先祖がそのように神から愛され、そのように神から扱われ、そのように神によって救われて来たのだから、同じようにあなた方も祝されているんですよ、と語りかけている。そういう在りようというものを、この御言葉の中から学んでいけるのではないかと思います。

誘惑とか腐敗とか墮落とかという状況は「神との関係の欠落」から起こってまいります。それは、信仰的緊張感を失った生き方、神の御前に畏れをもって立つことを止めてしまった生き方から、生まれて来ます。世の中の人はその平安だと誤解しています。内的な畏れや緊張感がなくなること、言い換えれば、人々は外的な安定感をもってこの世で勝ち得、時を過ごすことこそが、平安なのだと思ってしまうのですが、本当の平安は、そうではないのです。

神がお親しく「お前たち、あなたがた」と呼びかけられる御前に、心から額づいて、何が語られるのかを緊張をもって聴き続ける中で、私たちの平安は満たされていくのです。

ところが、皆の思い願いはどうもそうではなく、自分はもうこれでいいのだ、殊更、今更、神の御言を聴かなくとも、神のことは既にもう十分知っているから、それでいいのだ、と

というような格好をつけたがります。それで、神の御言を分かり切ったものとして、緊張をもって御言の前に立とうとしない姿の中から、結局は、誘惑とか腐敗とか墮落とかが生まれて来るのです。ですから、一応今は安定して、すべてがこれで一段落していますと言っている時が、実は一番危険な時なのだということを、私たちは何時も覚えておかねばなりません。

そんなままでいいと、神は決してお思いになっていないのです。裁かなければならない世の中だと、いつも思っておられるはずですから、そういう裁かれなければならない世の中に、私たちも今、生きているのだということをしっかり踏まえておかねばなりません。ともすると、裁かれなければならない世界の次元に、自分がうまく合致したことで、安住してしまうことが起こって来ますから、そういう危険を何時でも目覚めさせられながら、主と共に歩いていくこと、それが大切なことではないでしょうか。

ヘブライ人への手紙を学んでいく時に、「神の裁き、神の聖さ、神の公正さ、神の義」そういうところを私たちが気をつけながら、学んでいくことが大切だと思います。

だから神は、私たちに対して、あえて『不都合』を沢山用意してくださっているのです。私たちはとかく欲望に生きようとしみますから、神はそれに対して何時でもノーと仰るのです。神にノーと言われることは、私たちに『不都合』なのです。居心地悪いのです。ですから、私たちは、そういう言葉はなるべく避けようと、神からの「わたしはあなたを愛している」という言葉ばかりを一所懸命探します。「聖書の中には愛のことばかり書いてあるから、愛の書物だから、私を困らせるようなことは言われない」と自分で独り決めします。そうでない所を見つけると、これは昔のユダヤ人に言われた言葉であって、自分には言われていない、などと切り捨て、考えずに、無視するわけです。(アーメン・アーメン)

そういう独りよがりに対して、神は「都合の悪いことが起こるのは、あなたがたが創られた存在で、未だ完全でないという証しなのだから、それはそれでいいんだよ。」と仰る。むしろ「それにも拘わらず、愛されているということに、しっかり目を留めていなさい。」と仰るのです。

しかし「愛することは、決して、誤魔化したり、無闇にかばい立てしたり、正しさを主張しなくてもいいんだよと慰めたりすることではない」ことを、しっかり捉え直す必要があると思います。神の聖さとか、義というものは、そういう意味で、私たちにとっては大変辛いものであり、大層きついものでもあるのです。

しかし、神が聖く、義であられるゆえに、その御方に創られたという意味があるわけですから、やはり神の聖さとか、義というものに対して本当にしっかり目を向け、それゆえに与えられる愛の大きさ、尊さ、真実さというものを大切に受けとめて行かなければならないと思います。そして、愛と義が伴う神の愛が、イエス・キリストの十字架を通してでなければ与えられなかったことが、ものすごく深刻な問題であるということも。

キリストが来臨なさって以後、私たちにはもはや、私たちの願いや思いを風のように早く、火のように熱く、神に伝えてくれる（ある意味、不完全さを有する）天使は、必要ではなくなったのです。この認識が、大きな意味をもち、非常に大切です。

つまり、かつては、被造物である天使がそれをなしたが、今は神の子である御方の霊が、それを担ってくださっているとすれば、その執り成しの方がどんなに完璧であるかと、私たちは信じ、感謝しなければならないのです。

その意味で「御子は天使にまさる」のです。

(1996年2月10日)

説教者・森容子先生（峡南教会牧師）について

第一シリーズで、「ヘブライ人の手紙に学ぶ」の写書を始めましたところ、最初の「まえがき」のところの言葉でつまずいてしまいました。松山先生の奥様の清子さんにご相談し森容子先生をご紹介頂きました。そのご縁で森先生に校正をお願いしました。途中からはより多くの方々にお読み頂けるように、監修もして頂くことになりました。そしてさらに厚かましく、講述に関連する説教までお願いすることになりました。

第二シリーズでは、最初から校正・監修・説教を担当していただきます。説教によって「ヘブライ人への手紙」が持つ意味や、旧約聖書と新約聖書のつながりもより明確になり、講述の理解が深まると存じます。森容子先生に感謝です。（写者）

説教

「なまぬるさという罪」

ヨハネの黙示録 3：14－21

森 容子

今回は、黙示録2章～3章にわたる七つの教会（エフェソ・スミルナ・ベルガモン・ティアティラ・サルディス・フィラデルフィア・ラオディキア）へ宛てたヨハネの手紙から、7つ目の教会ラオディキアへの手紙を中心テキストに、主の御声、そして、主の喝！をお聴きしましょう。

まず、ラオディキアの教会の地理的、社会的、宗教的背景を概括してみましよう。ラオディキアは、リュコスとメアンデルという二つの峡谷に挟まれ、三つの主要道路の交差する要所にあり、リディア、フルギア等への入り口となっていました。

この町は、紀元前250年頃シリアのアンティオコス王によって建てられ、お妃の名前ラオディセに因んで命名されました。その頃の世界で最も富んでいる商業の中心地のひとつであり、金融業と、その地方特有の黒い羊毛による衣服の生産とによって知られており、教会自身もそんな富裕な社会の只中にありました。

また、巡回裁判が行われる大きな町で、有名な医学校を誇っておりました。この医学校は特に、耳につける軟膏と眼に塗る目薬とで世界中に知られていました。富裕の証としては、61年の大地震の際は、ローマ政府の救援を断って独力で再建を果たした町でもあるということです。

当時、ユダヤ人の成人男性が7千人以上居留しており、この数はエルサレム神殿へのあまりに多額な神殿税によって判明しました。それによって、ユダヤ人の習慣を守る権利が、この町には特別に認められてもいました。

この町のキリスト教会は、パウロの弟子エパfrasの説教によって建てられた教会で、パウロはこの教会へも手紙を書き送りましたが、なぜか失われてしまいました。この時代、この世の繁栄を極めていた一方で、神を求める心を無くしていたこの教会は、黙示録に記される7つの教会中、最も手厳しく批判されております。そして、復活の主が何一つ誉めるべき点を見出されなかった唯一の教会として、汚名を留めております。

では、テキストに入ってまいりましょう。

14-16 **ラオディキアにある教会の天使にこう書き送れ。『アーメンである方、誠実で真実な証人、神に創造された万物の源である方が、次のように言われる。「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」**

このようなラオディキアの教会については、コロサイ書の4：13で、パウロの弟子エパfrasが担っている多大な労苦について「わたしは証言しますが、彼はあなたがたのため、またラオディキアとヒエラポリスの人々のために、非常に労苦しています。」と告げています。

更に17節では、パウロが、この教会の初代監督であったアルキポという人に宛てて「**主に結ばれた者としてゆだねられた務めに意を用い、それをよく果たすように**」との警告も書かれており、ヨハネの黙示録が著される2、30年も前から、既に、この教会のリーダーたちの墮落が始まっていたことを示しています。

この教会を象徴する「なまぬるい」という表現は、リュコス渓谷を挟んで相対する所に温泉地として有名なヒエラポリスがあり、そこからの熱い鉱泉の水道が、ここに引かれて来る間に冷めて、ぬるくなってしまったことを譬えています。

硫黄分を含む「なまぬるい」温泉水は、吐き気を誘発する吐瀉剤としてしか使い道がないというような水で、ヒエラポリスの熱い温泉水と、コロサイの冷たく新鮮な水とが、この地の「なまぬるい」水と対比され、信仰的な象徴となっています。

信仰的に「熱い」水というのはお分かりになるでしょうが、信仰的に「冷たい」水とは、何でしょう？ キリスト教を公然と批判する勢力であるとする説と、新鮮で生き生きとしたコロサイ教会等の信仰を表すという説とがあります。しかし、強く批判する勢力は一度裏返ると、非常に力強い熱心な信仰者ともなります、パウロのように・・・ですから、「熱い、冷たい」の両者とも、ラオディキア教会の無視、無関心、無感動に勝るものとされています。

17 **あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。**

暮らしは貧しいけれど、実は、靈的にとても豊かなスミルナの教会とは対照的に、このラオディキアの教会は小アジアのどの都市よりも富んでいながら、実は最も靈的に貧しい教会であると、酷評されております。

18 **そこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精錬された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬をかうがよい。**

「裸の恥をさらさないように、身につける白い衣」とは、キリストの恵みのみが与える、麗しく香り高い「霊的な品性」のことでありましょう。生ける屍とまで評されたサルディスの教会でさえ、白い衣を着せて頂ける「残りの者」と言われる人々がいましたが、ここでは、白い衣を着せて頂ける人が皆無です。

白い衣や霊的な目薬を「わたしからかうがよい」というお勧めは、「富裕を誇るあなたたちが、お金で買えるものなら、買いなさい」ということの逆説として言われています。これらは、この世の金銭をいくら積んだとて、決して手に入れられるものではなく、深い悔い改めに対する恩寵として神様より給わる「火で精錬された金」をもってしか受け取れないものだからです。そして、真に裕福になる道は、そこにしかないことを、はっきりと伝えられています。

ラオディキアが、先ほど説明しましたように、目薬と、黒い羊毛による衣服の生産で有名な町であることを十分踏まえて、敢て、この「身に着ける聖なる白き衣」と「信仰のための霊的な目薬」のお勧めがされていることを憶えたいと思います。目に見えるものは、役立たないのです。

19 **わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。**

しかしながら、これほどまでにどうしようもない教会を、主は諦めることなく、「愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする」と宣言されます。この叱るという動詞エレンカインは、バテシェバ事件でナタンがダビデに行った「叱責：エレンコス」に関連する類語であり、相手が自分の非を認めずにはいられないように話しかけ、間違った生き方や行為を償おうと決心するよう導くこと、つまり懲罰よりも啓蒙に近い言葉、神の愛アガペーそのもののお言葉と言えましょう。

主イエス様のこの忍耐とこの慈愛、そしてこの知恵によって、私たち自身も生かされているのだということを、しみじみと思い入り、感謝し、「悔い改めよ」というお言葉を深く受け入れたいと思います。

20 **見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしを聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであらう。**

ここに至り、心の戸を叩いてくださるキリスト、心の中に入っていらして共に食事をしてくださるキリストが描かれています。食事と言えば、愛餐ですが、神の愛アガペーは、愛餐とも親睦とも訳されることを覚えておいてください。

キリスト教が他の宗教と異なる点は、人が神様を求めるのではなく、先ず神様の側から人を求めてくださることにあります。ひとつ指を鳴らされれば、一瞬にして命を取ることさえ可能な御方であるにも拘らず、神の御力で強引に心の中に押し入って来られることはなく、あくまでも戸を開ける側の自由意志を尊されつつ、心の扉の前でひたすら待っておられるのが、私たちの主、キリスト・イエス様です。讃美歌21の430「扉の外には」に、そんな主のことがしみじみ謳われています。

また主は、食卓において、私たちが主と等しい位置においでくださっています。その証しとして、「わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をする」というように、両者の立場が同列に、並行に、描かれています。

また、主は、「わたしの食物とは、父なる神の御心を行うことである。」と言われますが、生ける限り、主と共に味わう御言の糧を感謝しつつ、心から主にお仕えしてゆきたいと願います。

21 勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように。

何と、口から吐き出すと言われた「ぬる臭い水」であったラオディキアの教会の人々に、勝利の座が用意されていることが、ここに告げられています。しかもイエス様の玉座に共に座らせてくださると・・・これに優る祝福があるのでしょうか！ここに、七つの教会で最も素晴らしい祝福が告げられているのです。主は、激しい警告に教会の民の立ち直りを信じておられたのです。

では、他の6つ教会には、どんな祝福が宣言されているのか、そしてそれらの教会への手紙には何が告げられていたのか、おおまかに見てみたいと思います。

エフェソの教会：勝利を得る者には、神の楽園にある命の木の実を食べさせよう

この教会は、「初めのころの愛から離れてしまった。だから、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて初めのころの行いに立ち戻れ。もし悔い改めなければ、わたしはあなたのところへ行って、あなたの燭台をその場所から取りのけてしまおう。」と言われた教会です。

スミルナの教会：勝利を得る者は、決して第二の死から害を受けることはない。

この教会は苦難や貧しさを知っている教会で、「あなたは、受けようとしている苦難を決して恐れてはいけない。見よ、悪魔が試みるために、あなたがたの何人かを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間苦しめられるであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすればあなたにいのちの冠を授けよう。」と言われた教会です。

ベルガモンの教会：勝利を得る者には隠されていたマンナを与えよう。また、白い小石を与えよう。その小石には、これを受ける者のほかにはだれにも分からぬ新しい名が記されている。

この教会は、「あなたの住んでいるところにはサタンの王座がある」と言われた教会で、バラムの教えを奉ずる者やニコライ派の教えを奉ずる者たちがいると注意されました。そして「だから、悔い改めよ。さもなければ、すぐにあなたのところへ行って、わたしの口の剣でその者どもと戦おう。」と言われた教会です。

ティアティラの教会：勝利を得る者に、わたしも明けの明星を与える。

この教会は、「あなたの行い、愛、信仰、奉仕、忍耐を知っている。更に、あなたの近ごろの行いが、最初のころの行いにまさっている」と誉められました。が、「あなたは、イゼベルという女のすることを大目に見ている。この女は、自ら預言者と称して、わたしの僕たちに教え、また惑わして、みだらなことをさせ、偶像に献げた肉を食べさせている。」と注意を受けた教会です。

サルディスの教会：**勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。わたしは、彼の名を決して命の書から消すことはなく、彼の名を父の前と天使たちの前で公に言い表す。**

この教会は、「あなたが生きていたとは名ばかりで、実は死んでいる。目を覚ませ。」と叱られました。一方で「少数ながら衣を汚さなかった者たちがいる。彼らは白い衣を着てわたしと共に歩くであろう」とも言われた教会です。

フィラデルフィアの教会：**勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱にしよう。彼はもう決して外へ出ることはない。わたしはその者の上に、わたしの神の名と、わたしの神の都、すなわち、神のもとから出て天から下って来る新しいエルサレムの名、そして、わたしの新しい名を書き記そう。**

この教会は、「私があなただを愛していることを彼らに知らせよう。あなたは忍耐についてわたしの言葉を守った。それゆえ、地上に住む人々を試すため全世界に来ようとしている試練の時に、わたしもあなたを守ろう」と言われた教会ですが、サタンの集いに属して、自分はユダヤ人であると言う者が内部にいることも書かれています。

これらの教会は夫々に、何の問題もないという所はありません。教会は、信仰・御国という上向きの力が強く働くと共に、それと同じくらい強い下向きの悪の力も働いてくる場所です。ですから、礼拝においては、悪を撤廃するための霊的な力を求めることが大切です。それに対して、これらの7つの教会に共通して言われていることは、「**霊が諸教会に告げることを聞きなさい。**」であり、私たちも、この御声に聞き従わなければなりません。耳に痛くありましても・・・。

エフェソに始まる七つの教会を聖言によってラオディキアまで一巡しますと、そこに一貫しているのは、富や、皇帝礼拝、享楽、長命等、この世の価値や力に誘惑されてそこに傾注し、それを支柱としていく生き方は、復活の主の御前では罪の道以外の何ものでもない、との戒めです。

そこで、私たちをとりまく今の教会の現状を振り返ってみますと、スミルナ教会の極貧やベルガモン教会の大迫害に起因する差し迫った「いのちに関わる問題」は殆どないでしょうが、ティアティア教会の“優柔不断”、サルディス教会の“弛緩・妥協”、ラオディキア教会の“なまぬるさ”といった信仰の問題は、それと気づかず、どの教会にもあるように思います。

今日の教会は、と一概には言えませんが、再臨の日が今日明日にも差し迫っているという緊張感に乏しく、著しい悔い改めの気運が感じられません。そして、礼拝や信徒のお交わりを通して、自分たちは主の平和：シャロームに囲まれているという安堵感に浸されつつ、目前に次々と計画されていく教会行事の達成にのみ心が向けられている、といった様子・・・これでは、警鐘の発露である黙示録の世界は、まるで昔むかしの物語の世界として、遙か彼方に追いやられてしまっています。

私たちキリスト者は、ここに示された「**わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。**」に、真摯に心を留めたいと思います。

私たちは、主に選ばれ、この世と神様とを結ぶ祭司の役目を帯びてこの世に遣わされた者として、「**目覚めよ**」と、かの日への備えを奨励する責務があります。主は黙しておられるのではなく、私たち人間たちに執行猶予の期間を与えられているのです。今、世界で争いに逆立っている民

が、罪を悔い改めて、回心へと至る定められた時を、主は実に辛抱強く待っておられます。

しかし、この世にうまく迎合し依存しておれば、十字架のキリスト無しでも十分に生きられる、そして自動的に天国へも・・・と本気で思っている大多数の人々を前にして、隠れキリシタンの大迫害時代よりも、むしろ今現在の方が余程宣教に困難な時代であると、1%未満のキリスト者の多くが、溜息と腕組みをしている状態にあります。キリストは無力なお方なのでしょうか、と問うてみたいと思います。更に、教会相互が教理の違い等に拘っているのならば、御国において私たちは一つなのではないのでしょうか、とも問うてみたいと思います。主が奨励された兄弟姉妹の相互愛は、動かせぬと思うものを、動かしてゆくことでしょう。

今、力ある主の御前に民が一つとされ、この時代に語られる静かなる主の御声に聞き従う真のシャロームを願います。教会の頭と、力ある右の御手という主の権威は、昔も今も永久に変わらず、わが主、イエス・キリストにあられるのです。私たちが目指すべき御国への道程は、キリスト・イエス様の真実と御慈愛に委ね、従いゆく、祈りと賛美の先に続いてゆきます。

しばし、黙祷致しましょう。

写者（初版）あとがき

当時根強く残っていた「天使礼拝」に対して、正しいキリスト信仰を根気よく伝えるとともに、一切妥協のない「イエスをキリストとする」信仰の原点に立ち返りなさいと勧告している。現代の私たちの周りには、「天使」に代わる「恵み」という意味を醸す多くの偶像からの誘惑がある。しっかりと見極めて、「十字架の信仰」に立ち返れと松山幸生先生は聖霊に満ちて叫ばれている。私のような者をよく知ってくださった故に激しく勧告してくださっている。感謝（2023年9月11日）

写者（第2版）あとがき

感想1、天使礼拝について

著者は、キリストが天使に勝ることを、第二世代のユダヤ人キリスト者に向かって旧約聖書を引証しながら、語気を非常に強めて説き明かしている。それは、彼らが迷った信仰、即ち、根強い「天使礼拝」に陥って、真理の道から遠ざかってしまったためである。かような「天使礼拝」は、モーセが40日間神の山なるシナイ山に籠りきりだったため、もはや戻ってくることを諦めたと勘違いした人々が、金の子牛を作って礼拝対象にした背神行為に等しい。（この金の子牛の礼拝は、後に列王記等に「イスラエルに罪を犯させたヤロブアムの罪」として、何代もの王に引き継がれた背神行為であり、北イスラエル王国の滅亡に繋がった。）

松山先生は、著者に劣らない熱情をもって、このような忌々しき事態は、神でない天使を神とする偶像崇拝であると、厳しく我々にも警告されています。人間が自分に都合のよい神を作り、祀り上げる行為は、古今変わることなく続いています。「（御国への）道であり、真理であり、（永遠の）命である」イエス・キリストこそが、「すべてに優る主権、

優位、至高、そして先在性、永遠性を保っておられる神の御子である」ことを明らかにする必然が、どんな時代にもあることを学ばせて頂きました。

感想2、天使礼拝への誘惑に対する警告

大地の基を据えられた全能なる神は、義を愛し不法を憎んだ。主は虐げられる全ての者のために正義と公正を行う。公正の笏が不法を裁く笏である。これは聖なる神を礼拝するに忘れてはならない心得である。

しかし、人間はなんとなく安定できそうな時代（状況）になると、神との緊張関係が薄れ、天使礼拝に傾いていく危険性を持っている。それは、新約聖書の時代、そして今の時代に至っても変わらない。かように松山先生は言われている。

不法を憎む聖なる神は、人々の罪をお赦しにならない。罪は裁かれなければならない。それが神の義であられる。この義を神が貫き通されたのが、御子の十字架上的死である。イエスは罪を一斉冒されぬまま、十字架上で完全に神に処罰された。

イエスは、私たち人間の冒したすべての罪の処罰を、自ら御身に請け負われて、十字架にかかれた。本来十字架刑に定めらるべき私たちに成り代わって、受けてくださり、私たちを、償い切れぬ審きの責め苦から解放して下さった。そして、これぞ神の愛なると貫き通されたのが、十字架上的の侵し難き主の御姿と、人間への厳罰の赦しを乞われる主の叫びである。かくして神の聖と義、そして、イエス・キリストの御愛の絶頂が現されたのが、十字架の出来事である。

「人間には、ただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている。」（ヘブライ人への手紙9章27節） その定めをイエス・キリストがお受けくださったという、まごうことなき真実を、私たちは最も厳粛に受けとめねばならないと思います。松山先生のお説教において学んできたことが、ここでもしかと語られています。

私は、大学時代のゼミの指導教授であった中村勝己先生の言葉を思い出した。「現世の人間の悩み、苦しみ、問題としていることを、クリスチャンが、いっそう深い意味で、いっそう高い次元で、いっそう広い視野で捉えて、より根源的な回答を与えることができないならば、彼らはこの世にあって十分機能を果たしているとは言えない。」と。

厳しい内容である。根源的な回答には真理への畏敬と深い知識に加えて、事にあたり「然り、否」を明らかにする勇氣ある行動力が求められる。学生時代を思い起こして、今、私に響いてきた言葉である。松山先生の警告された天使礼拝は、文化の変遷にともなって種々の形での偶像崇拜へと人間を誘惑してきた。私たちは（政治家を含め）気づかずしてその誘惑に陥ってきてしまった。基礎を堅固にした信仰へと成長したいと励む日々を送りたいと願う。

2024年9月11日